
生人形

ayu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生人形

【Zコード】

Z0358T

【作者名】

a y u

【あらすじ】

人形師の青年と、心を持った人形のお話。

(前書き)

楽しんで頂ければ幸いです。

貴方を暖めてあげたいのに

ねえ、泣かないで。

貴方が泣きやむまで、抱きしめていてあげるから。
あたしが抱きしめて、暖めてあげるから。
なのに、どうして？

どうして、あたしはこんなにも冷たいの……？

1

ゆめ。

夢。

コメ。

「君の夢を教えて？」

夢なんて、考えたことないよ。

今まで、あたしは『心』を持つていなかつたから。今が楽しくて、
これからのことなんて思いもしなかつたから。ただ、『今』が続け
ばそれで良い。

「“今”が、ずっと続いて欲しい」

「良いね、それ。きっと素敵だ」

「うん、きっと素敵」

あたし達は互いに顔を見合わせ、共に笑った。

貴方はあたしに、『心』をくれた。ただの『器』でしかなかつたあたしに、貴方は命を吹き込んだ。作り物の『器』に、本物の『心』。あたしは自分の意思を持ち、貴方との時間をいとおしむ。この時間が壊れなければ、あたしは幸せ。だから、『今』が続けばそれでいいと思う。

「ずっと一緒にいよう」

「うん。ずっと一緒に」

一つの部屋の中で、向き合つて座るあたし達。蠟燭の灯る、飾り気のない広い部屋。一組の蒲団の上で、向かい合つて座るあたし達。あたしが目を閉じると、貴方はあたしの頭を撫でてくれる。ふわふわと、優しく撫でる。

「好きだよ」

貴方はあたしの頬に手を添え、微笑んだ。貴方の手は白くて、とても綺麗。

「僕も」

こう言って、あたし達は唇を重ねる。

あたしが望むのは、貴方との時間。

夢…。

あたしの夢は、貴方と同じ時間を生きること。

“由愛”にしよう。

こんなに必死になつてものを考えたのは久しぶりだ。だけど、君には素敵な名前を贈りたかった。僕の愛しい女性。その『女性』は、人形。球体の関節を持つ、精巧な型代だ。だけど、君は僕が今まで生きてきて、初めて愛しいと思った人だ。僕は君の器を作り、心を与えた。そして今度は、名前を贈りたいと思った。僕は君に“愛す

ること”を教えてもらつた。だから、愛の由来と書いて、“由愛”。
単純かもしれないけど、“ユメ”という音の響きも気に入った。

「お前は今日から、“由愛”だよ」

君はどんな反応をするだろうか。この名前を、快く受け取つても
らえるだろうか。何もない空間に向かつて、僕は一度練習する。君
の前で、きちんと言うことが出来るように。まるで不器用な学生の
ようだ。そう思つて、僕は一人、クスリと笑つ。

「 “由愛”」

気に入つてくれる。きっと。

蠟燭に火をつけ、街を見に行つた恋人の帰りを待つ。長く美しい
黒髪を持つ、僕の恋人。

「主」

襖の向こうから、愛しい声。

「ただいま」

「お帰り。寒かつたろう? 早く中へお入り」

季節は冬。外では真白な雪がちらちらと舞つてゐる。人形が気温
を感じるのかどうかは知らないが、由愛は優しく笑んで返事をする。
「うん」

表情の豊かな彼女は、まるで本物の人間のようだ。

彼女も初めはただの人形で、売り物だつた。精巧な人とよく似た人
形を作り、売ることが僕の仕事だから。けれど彼女は今までのどの
作品よりも美しく人間らしく出来たものだから、心を与えてみよう
と思つた。初めはただの思い付き。上手くいけば高く売れるかもし
れないと、単純にそれだけを考えていた。深い理由など何もなかつ
た。

その人形は、動き出した。

心を持つた人形は、世界中のどんなに優れた女性よりも美しく優し
く清らかだつた。世界の汚れたことも汚れたものも知らぬ君。手離
したくないと思つた。心から。大切にしたいと思つた。

「ねえ、お前にね、あげたいものがあるんだ」

「なあに?」

可愛らしく首を傾げる。本当に、なんて愛しいのだろうか。
僕は売るはづだつた人形に“恋”をした。

「お前に名前をあげようと思つてね、ずっと考えていたんだ」

「……名前?」

愛しくて、僕は小さな体をぎゅっと抱きしめた。

「そつ、名前。お前の名前は、“由愛”だよ」

「“ユメ”」

「そう、“由愛”。愛の由来と書いて、“由愛”」
抱きしめたまま、耳元でわざやく。作り物の硬い身体を抱きしめたまま。

「由愛……。素敵な名前」

「君は僕に、愛を教えてくれた人だから」

彼女は、ふふとかすかに笑いを零した。

貴方はあたしを“人”と呼んでくれるのか、と。あたしはこうして心を持ち、話し、感情を表現することができる。けれど、あたしは人形。貴方の子を残すことすら出来ないのに、それでも貴方はあたしを“人”と呼んでくれるのか、と。

「由愛、僕は君を愛している。どうでもいい人を人形のようには扱うことは出来ても、心から好いている人を人形のようには扱う出来ないよ」

だからどうか、そんな悲しいこと言わないでくれ。

「……ありがと」

静かに咳く。

「名前、大切にするね」

泣き出しそうな顔でにこりと笑つて、由愛は目を閉じた。

「“由愛”」

咳いて、由愛は僕の頬に口付けた。

「嬉しい。すうへ、嬉しいよ」

「ユキ」「ユキ」

名前を『』えてから、由愛は僕のことを名前で呼びたいと言つてき
た。

「ユキ。……ユキ

二人だけで暮らしているのだから教える必要はないだろうと思つて
いたが、やはり呼び合には名前が必要だ。だから由愛に僕の名前
を教えた。『志音』というのが、僕の名前。ただ、親しい人は皆
“ユキト”ではなく“ユキ”と呼ぶ。だから、由愛にもそう呼んで
もらうこととした。由愛はその名前を、何度も噛み締めるように咳
いていた。

何度も何度も、囁くよつに。そして、心底嬉しそうな笑みを浮かべ
る。

「ユキ、好きだよ」

「知つてゐるよ。僕も、由愛を愛してい
る」

昔の自分なら、こゝして愛しい人に甘い言葉を囁くことなど想像
もしなかつただろう。それまで僕は愛というものを知らなかつたか
ら。幼いころに両親が他界し、それ以来親戚中をたらい回しにされ
て生きてきた。時には奴隸のように扱われ、時にはまるでいないも
ののように無視された。

人形師の親方のところに弟子入りしたのは八つの時。そこで初めて
まともな衣食住が確保された。ただそこに、愛はなかつたけれど。
一言田には追い出すぞ、出て行け、殺しちまうぞ。それが親方の口
癖だった。僕にだけその言葉を浴びせてきた。ここはこうするんだ、
こうした方がいいと周りの奴等は手取り足取り教わつてゐる中、僕
だけはよく殴られていた。一週間も寝たきりになつてゐたこともあ
る。その時でさえこの穀潰し、役立たずと罵られ、叩かれた。その
分、誰よりも早く丁稚から手代、番頭となり、暖簾分けをしてもら
えたが。

今になつて考へると、それも親心だつたのかもしれない。愛の鞭、という奴だ。期待されていたのかもしれない。羈縛しているように見えないよう沢山の技術を教え込む為、そうしてはいたのかもしれない。けれど、当時はこの世に愛などというものはないのだと思つていた。そんなものはまやかしにすぎないと信じていた。

「由愛、こつちへおいで」

素直に頷き、近づいてくる由愛に、僕はわずかに目を細める。由愛の為に仕立てた赤い着物が眩しくて、よく似合つていた。大輪の牡丹の花は、艶やかだ。

「綺麗だよ」

頬を撫でると、由愛は気持ちよさそうに目を閉じじる。

「ユキも。綺麗だよ」

髪、さらさらだね、と由愛は僕の髪に触れた。大嫌いだつた色素の薄い髪、白い肌。幼いころは、異國の人間の血が入つているのかと良く苛められた。大嫌いだつたのに、由愛がこうして触ってくれるとそれすらも気にならなくなる。

由愛の隣は、なんて心地いいのだろうか。

4

どうやら風邪をひいたようだ。先から熱があるらしく、寒気がする。僕は丹前を羽織り、火鉢の傍に寄つた。

「ユキ、どうしたの？ 寒いの？」

「風邪を引いてしまつたみたいだ。由愛に移つてはいけないから、そつちへ行つていってくれないか？」

「大丈夫だよ、あたしは人形だから。移つたりしないから安心して」あははと笑つて、由愛は僕の額に手を当てた。暫くそうしてはいたが、やがて悲しげに目を伏せ、手を離した。最近、由愛にはものの温度が分からぬのだということが分かつた。暑い、寒い、熱い、冷たい、そういうつた感覚が備わつてないらしい。

「……そうか

悲しいけれどその通りだ。由愛は、“人形”。

「なら、僕の隣に居てくれないか。由愛が傍に居てくれるといふく落ち着くんだ」

「うん」

僕の横に腰を降ろしながらそう言った。

「生姜湯でも作ろうか？ それとも、お布団敷く？」

「いや、いいよ。こうして、由愛の傍にいたいから。……由愛は、暖かいね」

僕は由愛の肩に寄り掛かり、目を閉じる。由愛は僕の背に腕を回して歌を歌う。心地良い澄んだ声。ああ、なんだか酷く懐かしい。子守唄のように響くそれは、語らううつな恋の歌。愛しい人への優しい歌だ。

「どこで、覚えてきたんだい？」

「街で。小さな舞台が作られていてね、女人人が、歌つていたの。それで覚えた」

「……そうか、良い歌だ」

「うん」

由愛は小さく頷く。

「ねえ由愛、歌つて？」

「うん」

頷いて、歌を歌う。とても優しい、恋の歌。

なかなか熱が引かないみたい。

あたしは生姜湯を作りながら横になっているユキを見た。時折咳もしているし、眩暈もするみたい。大丈夫？ って聞いたら大丈夫だよ、ってユキは笑う。けど、それが余計に心配になる。今はそうでもないみたいけど、本当につらそうな時でもそう言うから。

……人間になりたいな。そしたら、あたしに風邪を移せばいい。人に移せば早く治るつてお隣のお兄さんが言つていたから。

「ユキ、生姜湯作つたよ」

「ありがとう」

言つて、ユキは少しだけ笑う。湯呑を受け取り、ふうと息を吹き掛け白い湯気を吹き飛ばす。

「ユキ？」

「何だい？」

ふと、腕に小さな紫斑があるのに気が付いた。

「腕、どうしたの？」

「え？」

「左腕。痣があるよ」

確かめて、ユキは首を傾げる。

「どこかに、ぶつけたのかな」

どうしたんだろうね、とユキは湯呑に口を付けた。ず、と音を立てて一口飲む。

「美味しいよ、暖まる」

「早く治るといいね」

「うん、そのうち治るよ」

穏やかな時間。幸せで、ゆつたりと過ぎていく時間にあたしは安心する。ユキもそこまで苦しそうではないし。あたしは無言のまま、湯呑を口に運ぶユキを眺めていた。いつまでも続きますように、と心の中で祈りを捧げながら。それはとても静かな祈り。

何かに蔑まれることも卑しめられることもない、ささやかな祈り。

……いや。これは祈りに似た確信、だろつか。この生活がいつまでも続くものなのだという根拠のない自信を、無意識に胸の中に持つているのだ。

あたしは思う。いつまでも、ユキが許す限りこの生活は続していくものなのだと。そしてそれは、きっと永遠にも思えるほど長い時間なのだろうと。この幸せは、長く続くものなのだ、と。

「由愛」

暫しの静寂を破り、ユキは湯呑を置いてあたしに手招きをした。あたしはお盆を傍らに置き、ユキに近づく。

「由愛」

ぎゅうと、抱きしめてくれた。

「ユキ？」

暫く、このままで……。

そう、聞こえた気がした。

6

「ユキ！」

ふらりと、辺りが揺らいだ。

辺りがどうか、正確には僕の体が揺らいだ。由愛は僕の体を支え、心配そうに眉を寄せた。

「ユキ、大丈夫？」

「あ…。ああ、うん。大丈夫。ちょっと眩暈がしただけだから由愛に助けられるなんて情けないね、と僕はほぼ万年床に成りつつある布団に横になつた。由愛は貧血時の基本通り、少し足を上げた状態にするべく僕の足の下に半分に折つた座布団を置いてくれた。

「まだ、体調悪いの？」

「うん、ちょっとね。でも大丈夫だよ。この間診療所に行つたらただの風邪だつて言われたから」

そう言いながらも僕は少し咳込んだ。心配を掛けまいとしての言葉だったのに、これではまるで説得力がない。そういえば、最近手足が痛い。内側から、というか、なんだか骨が痛いような感じだ。眩暈も酷いし、時折吐き気もする。それに小さな怪我が治りにくくなっていることも気に掛かる。

「でもでも、顔色、悪いよ。それに、お隣のお兄さんがあそこのお医者さんはヤブだつて……」

「じゃあ明日にでも他の医者のところに行つて来るよ

「絶対だよ」

「うん、絶対に」

笑つて、僕は静かに目を閉じる。心配そうな由愛の瞳を見ているのがなんだか辛い。

何でもないよ、大丈夫だよと言い続けることに罪悪感すら覚える。こんなにも体が重いのに、僕は大丈夫だよと繰り返す。異常なほど感じる倦怠感、気づけば増えている身に覚えのない紫斑。この体は一体、どうなつていいのだろうか。

泥のように纏わりついてくる不安。そして気氛るや。

それを隠すために僕は目を閉じる。

何か　由愛を不安にさせることが、もしくは死ぬこと、だらづかを恐れ、僕は幾つもの願いを胸に秘める。

神様神様、お願ひです。

信じてもいない神様に、僕は必死になつて縋り付く。どうか神様、由愛だけは幸せに……

7

暫くして、ユキは血を吐いた。

あたしが買い物から戻ると、布団が赤く染まっていた。買い物袋を落とし、あたしはその様を凝視する。

「……ユ、キ？」

嫌だ。

「な、んで……？」

嫌だ！

嫌だ嫌だ！

ユキが死んじゃうーー！

何も考えられなくて、あたしは外に飛び出した。

「　おや、由愛ちゃんじゃないか。どうかしたの

穩やかな、
何も知らない隣人の笑顔。

工井

「こんな時なのに、あたしの目から涙が零れることはない。
由愛ちゃん？」

「助けて!! ユキがつ!! ユキが死んじゃう!!」

言うや否や、お兄さんはあたし達の家に駆け込んだ。そしてユキを見るなり叫んだ。医者を呼んで、と。放心状態のあたしに、早く、と彼は叫んだ。あたしは中途半端に頷いて、竦んだ足で走りだした。助けて。助けて。お願いだから、お願い、ユキを助けて。

「田嶽」

診療所の一室で井戸薙ぐ刃を開いた

「田邊」

ユキは微笑み、あたしの頬に触れた。

「僕、もう長くないみたいだ。……ああ、由愛、お願ひだから、そんな泣きそうな顔しないでくれ。僕はね、由愛の笑った顔が一番好きなんだよ……」

白くて、細くて、綺麗な指先。ユキの瞳から、一筋の涙が零れる。あたしはユキを抱きしめ、瘦せて骨ばった肩に顔を埋めた。ユキの身体がわずかに震えているのが分かる。

悲く　心のあわでして　醜く　寒いんだ

つと抱きしめて、暖めていてあげる」

「泣かないで」

どうしてあたしは「んな」にも冷たいの……？

結局、ユキは助からなかつた。

血液の、病氣だつたといつ。

初めはまるで風邪のような症状で、次第に悪化し、死に至る。病名は『白血病』。

あたしはこれから、どうやつて生きていけば良いの…？

優しい笑顔も、髪を撫でる柔らかな手のひらも、あたしを呼ぶ穏やかな声も、全部全部、一遍になくなってしまった。

分からぬ。

ああ、誰か、あたしをユキの所に連れて行つて。

でも、駄目だ。多分、きっとユキはあたしが死ぬことは望まない。そしてそれ以前に、誰かがばらばらに解体でもしてくれない限りあたしは死ねないだろう。

あたしの瞳から、涙は流れない。

悲しくて、切なくて、あたしは無理やり口角を上げた。

ユキは最後に、私の笑顔が好きだと言った。だつたら、あたしは笑つていよう。無理矢理でも、何でもいい。あたしは貴方の墓石の前で、ただひたすらに微笑んでいる。

いつかきっと、この体が錆びれ、動かなくなるその時まで。

あたしに死が訪れるまで、あたしは貴方の恋人でいよう。貴方が好きだと言つた、この笑顔のままに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0358t/>

生人形

2011年5月31日12時07分発行